

令和4年度 かほく市立外日角小学校 学校評価中間報告書

重点目標	具体的取組		主担当	現状	評価の観点	達成度判断基準	肯定的結果	達成度	結果より	今後の方針	学校関係者評価
1 授業後半の充実と深い学びの実現	①	学習意欲を高める指導の工夫を図る	学習指導部	「やってみたい」「考えたい」という学習意欲には個人差がある。自分の考えをもつことが難しかったり自信がもてなかったりする児童も見られる。	【成果指標】 解決したくなる課題設定の工夫や課題解決を見通すための手立てを行っている。	一日の授業で、 A：3時限以上できている B：2時限以上できている C：1時限以上できている D：ほとんどできていない	89% (教)	B	肯定的評価が前年度前期と同様の結果である。	課題に対して見通しがもてるように、既習を想起させたり、生活経験と結びつけたりして考えられるようにする。また、一人一人の様子を見取り、個に応じた支援を行うと共に、アドバイスし合う時間も確保していく。	・計算カードや九九など積み重ねが大切な学習については、地域の資源を活用して学習の補助をしていくことはできないか。
	②	授業後半の充実と深い学びの実現を図るために、ねらいに迫るための発問を工夫し、学び合う場を設ける★	学習指導部	他の児童の考えを聞いて自分の考えを再考したり、考えを練り上げたりする力が弱い。自分の考えの変容を感じている児童も多くない。	【成果指標】 深めの発問（切り返しや問い返しの発問）の準備をして実践する。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	90% (教) 88.8% (児)	B	児童「授業が分かりますか」のA評価が、昨年度前期より5%程度下がっている。	児童の思考の曖昧な部分を明確にしたり、ねらいに迫ったりできるような発問をし、より理解を深められるようにする。また、児童の思考の流れが分かるような板書の構造化を図る。	
	③	家庭学習の定着・習慣化を図る	学習指導部	学年に応じた家庭学習の指導の継続により、宿題の提出率はよくなってきている。個別指導が必要な児童は複数いる。	【成果指標】 宿題の提出率が90%以上である。	A：90%以上の児童ができる B：70%以上の児童ができる C：50%以上の児童ができる D：50%未満の児童ができる	100% (教) 77.7% (児)	A	児童「自分で計画を立てて勉強しているか」のA評価が、昨年度前期より3%上がっている。	家庭学習の習慣化は定着しつつあるが、個人差が大きいので、児童・家庭に応じた声かけや支援、連携を行っていく。また、自学ノートを自発的に進めていけるように、例を示しながら継続して指導する。	
2 学習場面に応じた1人1台端末の効果的な活用	①	学校で読書する習慣を身に付ける	学習指導部	低学年は、図書館に楽しんで通う姿が見られるが、高学年になると進んで読書をする児童が少なくなる傾向がある。	【成果指標】 週に1回図書館を利用する児童が80%以上である。	A：80%以上の児童がいる B：70%以上の児童がいる C：60%以上の児童がいる D：50%以上の児童がいる	80% (教) 57.4% (児) 61.9% (保)	C	保護者の肯定的評価は、昨年度前期に比べて10%程度上がっているが、児童の肯定的評価は8%程度下がっている。	休み時間に本を借りるように声かけをする。授業中に全員で借りに行く時間を確保し、週に一度も借りていない児童には、個別に声かけをする。図書委員会のイベントを活用し、楽しく読書に取り組めるようにする。	・タブレットの家庭での利用についてどのように進んでいるのか。
	②	児童の主体的、対話的で深い学びを実現するために、ICT機器を積極的に活用する	学習指導部	授業のねらいを達成するための、ICT端末・機器の効果的な活用は、これからの段階である。	【努力指標】 問題解決のためのツールとして活用できるよう、系統的な指導の機会を確保する。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	84% (教) 89.3% (児)	B	児童・教職員共に肯定的評価が80%を超えている。	ICTに関する研修に参加し、学んだことを校内OJT研修等で職員に還元していく。実践例を共有し、学年に応じて共通実践を行いながら、学習のねらいに応じた、より効果的な使い方を見つけていく。	
3 いじめ・不登校・問題行動等の未然防止・早期対応	①	児童理解をもとに学校が楽しいと言える人間関係づくりに努める★	生徒指導部	自己肯定感が低く、学校が楽しくないと感じている児童が約13%いる。	【満足度指標】 児童が学校が楽しいと感じている。	「学校は楽しいですか（楽しいと言っている）」に対して、AもしくはBと答えた児童・保護者が A：90%以上いる B：85%以上いる C：70%以上いる D：70%未満いる	86.7% (児) 91.9% (保)	B	保護者の肯定的評価は昨年度前期に比べて上がっている。児童の肯定的評価は前年度前期と同様の結果である。	今後も、さまざまな場面で児童に任せる場面を作りながら児童の頑張りを認めていく。結果だけでなく過程を見とり温かい声かけをする。「いいねカード」も活用しながら児童の自己肯定感や自己有用感が少しでも高まるように努める。	・「いいねカード」の取組は、「一人一人の良さを可視化する」という点で大変良い。ただ、書きっぱなし、貼りっぱなしではなく、放送等で発表するなどの機会を設定して更なる活用をしてほしい。 ・本校児童の特徴をふまえると、結果より過程を見取ることが大切だと思う。 ・児童一人一人が自分の良さに気づき、自分の気づきや思いを積極的に表現でき、それを肯定的に受け止める集団であれば、一人一人のコミュニケーション能力は上がると思う。コミュニケーション能力の向上は、挨拶の質の向上にもつながる。
	②	いじめは絶対にいけないという意識を育てる	生徒指導部	「いじめは絶対にいけない」と思っていない児童が約3%いる。	【成果指標】 児童が「いじめはどんな理由があってもいけない」と感じている。	「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」に対して、AもしくはBと答えた児童が A：95%以上いる B：90%以上いる C：80%以上いる D：80%未満いる	95.9% (児)	A	児童のA評価は昨年度前期と同様であるが、C評価が増えている。	今後も、「いじめはどんな理由があっても許されない」という意識で指導にあたる。被害を受けた児童だけでなく、加害者となった児童の気持ちやいじめ行為に至った背景などに寄り添いながら話を聴くことを大切にしていく。	
	③	特別支援教育を充実させることで、いじめ・不登校の未然防止を図る	生徒指導部	個別に支援を必要としている児童が全体の10%以上いる。	【努力指標】 児童理解の会や学年会、終礼等で、児童の実態把握や問題の早期対応に努める。また、必要に応じて外部機関とも連携する。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	100% (教)	A	肯定的評価が昨年度前期より10%上がっている。	終礼での、学年ごとの児童理解が速やかな情報共有につながっている。今後も継続していく。また、地域支援室など外部機関との連携を積極的に行い、それぞれの児童に合った対応や支援ができるようにする。	
	④	児童が主体的に活動できる場を設定すると共に、集団の中で協力する心や他を思いやる心を育てる	特別活動部	なかよしグループ活動には、楽しく参加しているが、協力し合ったり、助け合ったりする関係が十分にできているとは言えない。	【努力指標】 なかよしグループ活動に自分から進んで活動に参加し、楽しむことができる。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	91.9% (児) 100% (教)	A	児童・教職員共に肯定的評価が90%を超えている。	運動会やなかよし遠足、縦割り掃除などなかよしグループでの交流がある行事や取組の機会を大切にし、グループ担当の教員を中心に認める声かけを行う。また、異学年間で「いいねカード」を用いてお互いを認め合う場面を設け、協力や思いやりの意識をより高められるようにする。	

4 視力低下防止と体力・運動能力の向上	①	メディアに関わる時間や就寝時刻等を把握し、自己の生活を振り返る取組によって視力低下の防止を図る	保健安全指導部	平日に、ゲーム・SNSや動画視聴など長時間にわたり画面を凝視している児童が多い。そのため就寝時刻が遅くなりがちになり、視力低下につながっている児童が少なくない。	【成果指数】 長時間メディアと関わることの危険性を理解し、メディアとの付き合い方をコントロールできる。	平日にゲーム・SNSや動画視聴など、インターネットを利用する時間が1時間未満と答えた児童が A：80％以上いる B：70％以上いる C：50％以上いる D：50％未満いる	43.1% (児)	D	児童の1時間未満の視聴が、昨年度前期に比べて10％以上下がっている。3時間以上視聴している児童が昨年度前期より5％増えている。	コロナの影響を受けてメディアと関わる時間がさらに長くなり、視力低下が進む結果となっている。そこで、メディアとの付き合い方をコントロールすることに引き続き取り組む。2学期以降、他校の実践も参考にしながら、児童の意識が高まる取組の工夫をする。	・視力低下については、学校だけでなく家庭の理解と協力が大切である。PTAと協力して呼びかけてほしい。 ・インターネットの使い方だけでなく、自分の一日の時間の使い方を意識させることも大事である。 ・家庭でのルールや決め方について、もっと学校からアドバイスしてはどうか。 ・本校の児童は、よく運動場で遊んでいるところがよい。 ・放課後の運動場などの開放や利用について、ルールがあるなら周知するとよい。
	②	体力・運動能力調査結果を踏まえ、体力の向上に努める	特別活動部	休憩時間に体を動かしている児童は多いが、運動能力調査の結果に反映されるまでには至っていない。また、運動を好まない児童もいる。	【成果指標】 マラソンやなわとびチャレンジカード等に意欲的に取り組み、体力・運動能力の向上が見られる。	A：90％以上いる B：70％以上いる C：50％以上いる D：50％未満いる	87.3% (児)				
5 教職員の超過勤務の縮減と若手教職員の超過勤務の育成	①	教職員の勤務時間の管理意識を高める	管理職	超過勤務はやむをえないという意識から、ワークライフバランスや適正な勤務時間のさらなる意識向上が必要である。	【成果指数】 一人あたりの平均時間外勤務時間が前年度比で5％以上減っている。	A：10％以上減っている B：5％以上減っている C：3％以上減っている D：減っている時間が3％未満	57% (教)	D	昨年度前期より肯定的評価は上がっているものの、全体的に低い。	前期は、時間外勤務80時間以内を達成した月が多かったものの、削減にはつながらなかった。後期は仕事の偏りが出てこないように、複数で対応するように心がけることで、勤務時間の削減をめざしていく。	
	②	自身の課題に向かって協働しながら主体的に職務を遂行する	教務部	それぞれの職務に対して、担当者任せきりにするのではなく、より主体的・協働的に遂行する姿勢が求められる。	【満足度指標】 自ら進んで職務を遂行し、今までよりも自信をつけることができたか。	A：よくあてはまる B：おおむねあてはまる C：どちらかといえばあてはまらない D：あてはまらない	90% (教)				